

心すべき危険地である。「掠」李筌は掠奪を不道德とし漢、高祖の例を援いて、則掠は則無掠の誤であらうといふが、それは誤の又た誤であらうと思ふ。儒教の教理を誤解したものゝ陥る弊である。需教徒はいふ「君子は勝つても逃げる敵を追はない、困厄に遭つてゐる敵は射ない。敵が退却する時はその輜重を掠めないで荷車の後押をしてやる、これが儒教の本旨である」墨子之に應へて「どちらにも仁者であつたら戦争は起らない、どちらにも無茶ものであつたら勝つた方が敵の輜重車を押しつてやつたりするものか。こちらが君子で負けた方が悪徒であつたら世の害を除くための戦争に逃げたものは追はなかつたら、悪徒は助かつて天下の害は除かれないから悪人に取つては理想の教へである」。

春秋で一ばんの軟派、兼愛家として知られた墨子でさへ戦争観はこの通りである。敵を掠め民を掠め野を掠めることは當時の戦争道徳として何の氣兼ねもないことであつた。佛さんは主將として適任者ではない。諸侯同志が相伐ち合ふことは周制に認められてゐないから純理論からいへば諸侯の合戦は義に缺けてゐる。その諸侯の甲を援けて乙を伐つ孫子は更に間違つてゐるが、そんな理論は昔から今まで、今から未來永劫まで通用する時代は決して無い。戦争を認めて戦争の末梢である掠奪を咎め立てする末學儒道は春秋戦國には通用しない。

圯地則行、圍地則謀、死地則戰。

圯地ニハ則チ行リ、圍地ニハ則チ謀リ、死地ニハ則チ戰ヘ。

圯れた地則ち沮澤などの行動に不便な形は早く去つて止るな。包圍され易い地に陥つたら局面打開を謀らねば危い。進退谷まつた死地には只死を決して戦ふあるのみ、或は死中に活を得られる。

三つの地質はそれ／＼の性質を持つ、それを知悉してそれに當てはまる行動をとらねばならぬ。

所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。

所謂ル古ノ善ク兵ヲ用フル者ハ能ク敵人ヲシテ前後相及バズ衆寡相恃マズ貴賤相救ハズ上下相收メズ卒離レテ集ラズ兵合シテ齊シカラザラシム。

古にいふ善く兵力を利用する者とは——能く敵の弱點を衝いて前進隊と後續隊との連絡を缺かしめ、本隊と支隊と相頼つて力を合はす能はざらしめ、上官と士卒とが相救ひ難からしめ、司

令者と受令者との關聯を取らざらしめ、卒が離れて攻撃を一點に集中せざらしめ、戦ひ合して各部隊の均衡を得ざらしめる。

敵の聯繫を切つてばらくにする、中に紐が通つてゐなかつたら念珠でない。

合於利而動、不合於利而止。

利ニ合シテ動キ、利ニ合セズシテ止ム。

吾が利とする戦機が敵の虚に合致すれば働きかけ、利に合はなかつたら靜止して機が熟するを待て。

利とは利益の利である、利に合しないのは戦機が熟してゐないのである。

敢問、敵衆整將來、待之若何。曰先奪其所愛則聽矣。

敢テ問フ、敵衆整ツテ將ニ來ラントス、之レヲ待ツ若何。曰ク先ヅ其愛スル所ヲ奪ハバ聽カシ。

然らば敢て問はん「敵衆が整つて（何の虚もなく）將に攻め來らうとする時、之れを待つは如何にする？」「敵の愛するところに先手を打つて之を奪ひ取れば敵は我が意のまゝになる」

敵の鋭鋒を避けるには他の方面にある敵の愛するところの港灣、都市、糧道、險要など、彼れの絶對に必要なものを奪はんとすれば彼れは此の途を棄て、他の途に力を轉ずるであらう。

孫子の子孫である孫臋が馬陵で龐涓を破つた兵法。

妻子財寶に愛着があれば解脱を妨げる、それが佛教徒をして出家せしめた理由であるが、坊主でも管長選舉に猛競争、狂運動をするのは名譽に愛着があるからである。愛着あれば痘痕と笑靨との見わけを誤つて戦争に負けると孫子はいふ。大局の勝を制しやうとすれば先づ愛を絶て、これが主將の悟である。基督のやうに敵を愛したら戦争ができないはずだが、末世の基督教徒は戦争を好んで、軍備に金をかける、親の心子知らずだ。武士道知らずの戦争好き、これは天下の厄介物である。

兵之情主速、速乘人之不及、由不虞之道攻其所不戒也。

兵ノ情ハ速ヲ主トス。速カニ人ノ及バザルニ乗ジ、不虞ノ道ニ由リ、ソノ戒メザルトコロヲ攻ムル也。

戦の精神は速きを第一義とする、急に敵の手配の間に合はない弱點に付け込み、虞もよらぬ道から注意を怠つてゐる虚を攻める、そこだ。

暗夜に竹藪の陰から躍り出して矢庭に道行く敵の向ふ脛を搔つ拂ひ、前にのめつたところを隙さず泥靴で脊骨を蹂みにじる——これは仁者の行爲か——然り、仁であり、道德でもある。

うつかりしてゐるところを後から敵に頭を毆られて卒倒する、——これは仁か。答へて曰く、毆つた方が仁であり、道德であり、毆られた方が不道德である。

孫子の兵法眼からみた仁とは手段が少々違法でも勝を制して味方の國民に利を與へることである（用間篇参照）ほんやりとして負けて、わが軍人に多くの死傷者を出すことは不仁の到りと説く。戦争は宗教とちがつてキャソツクを着て教壇でゴツドの意旨を人類に取次ぐやうな陰氣なものではなく、武装して生命の取引をする物凄い場面である。手早く敵の不用意な側面に鋭い劍を突つ込んで横腹を抉るのである。

「速きを主とする」とは悪魔に追跡を続けられてゐるやうに、時計の針と駈けくらをやる文化的小才子のやり方をいふのではない。眠るが如く愚の如く、行動は鈍いが、波が靜かになり魚が集つてきたその機會を見て、突然頭上からばさりと一網に打盡することである。たび／＼小せり合ひをするのではない、天下分け目はたゞ一勝負にある。「吳子」五度も戦へば、勝つてもその國家は禍を受け（或は亡びる）。四度も勝つたらその國は疲弊衰微する。三度勝つたら諸侯の長となれる。再び

勝つたら國王となれる。一度でいゝ、決定的大勝を得たものは天下に帝となれる。だから小刻みに

勝つて天下を征服したものは少い、却つて小さな勝を繰返して亡んだ例が多い。

虞らざる道から不意打を受ける危険に置かれてゐるから一日も安心ができないで年が年中、張り切つた生活をせねばならぬ、かやうな緊張を弛べ戦争の慘禍を事前に防ぎ、平時に於ける軍備競争から來る苦痛を和げるため軍備縮小の運動が始つた。この運動が實際的勢力を持つに到つたのは1919年のヴェルサイユ條約で、これによつて戦敗諸國の軍備を強制制限するとともに戦勝國においても軍備を縮小する諒解を遂げ、更に實際問題としてワシントン會議で日英米佛伊の間に海軍縮小の協定が成立し、これと同時に各國は自發的に陸軍兵力をも制限することになり我國では四個師團を減じた。1927年日英米三國はジュネーブに會して補助艦の制限を議したが決裂に終つた。1935—36年にも國際會議は開かれたが軍縮の掛け聲が高まれば高まるほど猜忌嫉視が強く進行し、表が平和の逆夢で裏が戦争の正夢らしい。果してドイツはヴェルサイユ體制を破つて英佛と戦ひ、不可侵條約が破れて獨ソ戦となつた。東洋では九國條約による支那の門戶解放主義が時代とともに褪色して支那事變となり大東亞戰に發展し、世界は樞軸、反樞軸の二大陣營に分裂した。春秋には墨子一派の倫理的平和論があり五霸の武力的平和主義があつた。その中にも齊桓公が葵丘に

召集した國際平和會議は最も有力なものであつたが、席上で殊勝らしく平和を禮讀した諸侯は歸國すると同時に軍備の擴張工作を始めた。現代に於いても國際公法は嚴として存在するが國家の上には更に上級の権力がなく、國家を強制する執行機關がないから違法行爲に對する制裁力も弱い。國際公法は平時法規と戦時法規とから成り、前者は更に戦争法規と中立法規とに分れ、戦争法規は戦争及びこれに附隨する行爲に關するものであるが、法典としては體系的のものでなく、構成の材料は慣習、道德、條約、學說等の雜駁なものであるから理論としても實際としても整備したものでない、従つて不法に對する制裁も微弱である、横車を押せば法の關所は容易に突破されるから軍備に信頼し能はぬ弱國民は、いつ其の戒めざる所を攻められるかも知れない、一生壓され通さねばならぬ。

掠於饒野三軍足食。謹養而勿勞。併氣積力。運兵計謀。爲不可測。投之無所往。死且不北。

饒野ニ掠ムレバ三軍食ニ足ル。謹ミ養ヒテ勞スル勿レ。氣ヲ併セカヲ積ミ、兵ヲ運ラシ計謀シ、測ルベカラザルヲ爲シテ之レヲ往ク所ナキニ投ズレバ死ストモ且ツ北ゲズ。

豐饒な野で掠奪徴發すれば全軍は糧食に缺乏することはあるまい。注意して士卒を養つて（美食をもつて腹を充たせ）無駄な働きに勞れしめず、勇氣を一致し精力を蓄積し、兵の隊伍を絶えず移動變化せしめることを計り、主將の胸中を測り知るべからざる行動を爲し、士卒をして故郷に歸り能はざる地形に投げ込んだならば、絶體絶命であるから彼等は死んでも逃げることはない。

勇氣は旨い糧食から出るといふ西諺は人種の別なく眞理であり、この書も兵食に就いて重きを置いて述べてある。しかし日本兵だけは心の糧をもつて戦ふところに特異性がある。日露戦役には日本兵は梅干と握飯とをもつて黒パンに對抗した、上海事變では糧食も向上して一種の日本式をもつて十九路軍の焼飯を壓倒した、併し主たる食物は米であつた。

觀戦した外國武官は日本兵の吶喊の聲の大きいのに驚いた。相手もあの聲には參つてしまった。談話には日本人の調子は低く支那人は疇高い聲だが、日本人の関の聲は腹の底から唸りを立て、戦塵を舞ひあがらせる。日本兵がどんな物を食つてあんな底力のある聲を出すかと調査したら米が七割で一日平均四合八勺、一合からの有效熱量は五〇〇カロリーしかなく、副食物といつても肉類は少く植物性が大部で、叩けば音のする反りかへつた乾魚を雜ぜた粗食である。しかも短いコンパス

で風のやうに突貫すると不思議さうにいふ。あれでは經濟斷交をやつても食物に困るまい。肉の不足は魚貝に豊かな環海から求められ、穀物は朝鮮から滿洲へかけて豊富なものと附加へる。その通り、ビフテキなくとも戦へる國民だ。

日本人の食料配分状態は米が中樞的役割を引受け、次に麥、雜穀、薯類、豆、蔬菜、魚肉、果實、獸肉といふ順位、その次が砂糖、卵、牛乳といふ小數點以下のものになる。どう考へても粗食である、粗食なるが故に經濟封鎖の防禦力は強く、梅干から百人力も出る。

死焉不得士人盡力。兵士甚陷則不懼。無所往則固。入深則拘。不得已則戰。

死、焉^{イッダ}ンゾ得ザラン、士人カヲ盡ス。兵士甚ダ^{オチ}陷レバ懼レズ。往ク所ナケレバ固シ。入ル深ケレバ拘ス、已ムヲ得ザレバ戰フ。

死を決したら何事か成らざらんやとして士卒が全力を效して戦ふ。敵の重圍に陥れば度胸が据つて却つて懼れなくなる。逃げ行く所がないと觀念すれば鬪志が固くなり、敵地に入ること深ければ拘禁されたやうになりその苦境を脱せんと衆心一致して渾身の勇をふるふ。のつびきならぬ場合には死を決して戦ふ。

支那は上古から徵募の傭兵であるから之を操縦するには手管を要する「徵兵令によるのでなく戰爭に苦力を驅つて戦ふに忠義を説いても駄目だ、仕方がないから死地にぶち込んで死力を出さしめる。米英の兵隊でもさうであつたが民主主義國民は中々死地に投じにくい。支那に徵兵令はあるにはあるが、まだ勵行されてゐない。

是故其兵不修而戒。不求而得。不約而親。不令而信。禁祥去疑。至死無所之。

コノ故ニ其兵修メズシテ戒メ、求メズシテ得、約セズシテ親ミ、令セズシテ信ニ、祥ヲ禁ジ疑ヲ去リ、死ニ至ルマデ之ク所ナシ。

この故に其兵は注意を與へて教へずとも自ら戒めて軍紀を守り、服従を求めずして服従せしめることを得。約束宣誓を用ひずして上官戦友に親み、嚴令を以て賞罰を定めずとも詐がない「祥（吉凶の豫言、妖祥の言、流言蜚語）を禁じ、士卒の疑（不安）を一掃し、死すとも遁るゝ所のなきことを確と印象せしめる。

「故」承上起後の故といふ、接續副詞には大故と小故とある。小故とは軽くその理由を説くクローズを導き、大故とは重く決定するに用ひる。是故は大故である。

科學が進めば進むほど死の恐怖が進む、いくら精銳な大砲をあてがつても逃げ腰で撃つたら弾丸は敵を外れて飛ぶのだ、だから孫子も士卒を絶體絶命の地にほり込んで、のつびきならぬ戦をさせよといふ、吳子も次のやうに兵を逃げ路のないところに投げ込めといふ。文化人は命は惜しいが戦争は好物で、物理學の研究室で顕微鏡下で勝たうといふが、負けるものはバチルスだけだ。武侯「どうしたら勝てるか」吳起「治まつた兵が勝つ」數の多少に關しないか「いや、關しない、命令が徹底しないで、止まる合圖をしても止まらない、進軍の鼓をうつても尻ごみしてゐるやうなまくら兵は百萬あつても役に立たない。吾が云ふところの治まるとは、靜止すれば規律があり動けば犯し難き威嚴があり、進めば抵抗するものなく、退けば敵は追ふことを躊躇する。進退に節度があり、左するも右するも指揮に従ひ、離れ離れになつても大局からみれば行陣が整つて、將卒は安危存亡を共にし、全軍の心が一致して、こぎ使つても疲労を訴へない。かやうに訓練した兵を逃げ路のない地形に放り込んだら、それこそ窮鼠だ。大きな猫の喉首に喰ひつく、……無限強だ。父の殺されるのを見殺しにする子はない、主將も士卒も有機的渾一體だ、これが父子の兵といふものである。」武侯問曰兵何以爲勝。起對曰以治爲勝。又問曰不在衆乎。對曰若法令不明賞罰不信。金之不止。鼓之不進。雖有百萬何益於用。所謂治者居則有禮、動則有威、進不可當、退不可追、前却有節、左右

應麾、雖絶成陣、雖散成行。與之安、與之危、其衆可合不可離、可用不可疲。投之無所往、天下莫當。名曰父子之兵。

吾士無餘財、非惡貨也。無餘命、非惡壽也。

吾が士餘財ナシ、貨ヲ惡ムニ非ズ。餘命ナシ、壽ヲ惡ムニ非ズ。

吾が士卒に金錢財寶を蓄へやうとする感念はない。彼等は財貨を嫌ふのではないが金錢を餘しても使ふ途もないから金に感念がない。餘つた生命はない、彼らは長壽を嫌ふのではないが、今日あつて明日のない命だ。

物質的慾念がない、慾があれば生に執著が強く、爲めに怯となる。剛は無慾の上に立つ。「論語」孔子「われ未だ剛者をみず」、或人いふ「申根は剛者ではないか」、孔子「彼は慾が深いから剛とはいへない。」葡萄美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君無笑。古來征戰幾人回。王翰。

令發之日、士卒坐者、涕霑襟、偃臥者、涕交頤。

令、發スル日、士卒、坐スル者ハ涕、衿ヲ霑シ、偃臥スル者ハ涕、頤ニ交ル。

國家の興亡、この一戦にかゝる！進軍令が下つた日、坐つてゐる士卒は涕淚が衿を濡し、偃臥んでゐる者は兩眼の涙が頤に交流する。

八月霜飛柳遍黃。蓬根吹斷雁南翔。隴頭流水關山月。泣上龍堆望故鄉。盧弼。

投之無所往、則諸劔之勇也。

之レヲ往ク所ナキニ投ズレバ諸劔ノ勇也。

かゝる泣き虫でも、逃げ路もない窮境に投げ込んだら猫は化して虎となる。「諸劔」專諸と曹劔。共に古勇士の名。

朔雪飄々開雁門。平沙歷亂捲蓬根。功名恥計擒生數。直斬樓蘭報國恩。張仲素。「命」を知ることには儒學の奥儀である。孔夫子も命を知るものは君子であり、勇氣のあるのは必らずしも君子ではないが、君子には必らず勇氣があると仰せられた。眞の勇氣は命（天命、運命）を知ることから發する。荻生徂徠も安心立命の境地は天命を知ることから始まるとして、人智人力のとゞき申さざる場にては天命に打ち任せ候より外、さらに他事無御座候。この故に勇怯の根本と申候は天命を知ると知らぬとに落著仕候事に御座候」といつた。

彼ら士卒は主將に信頼して智を抜かれ、ロボットのやうにその指すまゝに動いて、權利感念（生存權まで）も捧げて進んで行つたが、突然！氣がついてみれば彼らは死の魔牢に投ぜられたのであつた。どんなぼんやりでも豁然として自己の運命を大悟する。もうこゝまで突き落されては觀念して主將を怨まず、働けるだけ働いて、それで殺されたら天賦の宿命であり、もし助かつたら拾ひものとして度胸が定まる、彼らのこの決心によつて彼らの皮膚は矢でも鐵砲丸でも弾きかへすだけの堅さを加へ、かうなつたら相手の衆寡強弱は問題でない。そのこの機微を掴んで、いや應なしに超人間の怪力を揮はしめるのは兵法の妙である。

故善用兵者、譬如率然。率然者、常山之蛇也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。

故ニ善ク兵ヲ用フル者ハ譬ヘハ率然ノ如シ。率然トハ常山ノ蛇ナリ、ソノ首ヲ擊テバ尾至リソノ尾ヲ擊テバ首至リ、ソノ中ヲ擊テバ首尾トモニ至ル。

兵を用ふるに巧みな者は、譬へば率然のやうだ、率然とは常山の蛇の名である。その首を撃てば尾で拂ひ、尾を撃てば首が咬みつき、胴を撃てば首と尾とが同時に救ふ。

「常山」恒山である、漢の文帝の名の恒を諱んで恒を常とした。恒と常とは音は通じないが共につねを意味するから恒を常と代呼した。恒山は中華五岳(泰、華、衡、恒、嵩)の一である。「率然」蛇の固有名詞。率を卒(の去聲)に通ぜしめたので草卒、卒爾の卒で、突嗟、突然の意(卒は兵卒には上平、率は率土之濱などには去聲、音シユアイ、邦音ソツ。定率には律に通じ、去聲、音ルキ、邦音リツ)。

敢問。兵可使如率然乎。曰可。夫吳人與越人相惡也。當其同舟而濟。遇風。其相救也。如左右手。

敢テ問フ、兵ハ率然ノ如クナラシムベキ乎。曰ク可ナリ。夫レ吳人、越人ト相惡ムモ其ノ舟ヲ同ジクシテ濟リ、風ニ遇フニ當リ、ソノ相救フヤ左右ノ手ノ如シ。

又た一間を設けて論旨を進める媒とする——兵は率然蛇のやうに圓轉自在に首尾相呼應し得べきか。答へて曰く可なり。吳人と越人とは極めて仲が悪い(相互に憎悪觀念が熾烈である)が、吳越の人が同じ舟に乗つて揚子江を渡り、大風に遇つて舟まさに覆没しやうするに當れば、平生の怨恨を忘れて相救ふこと左手が右手を救ひ、右手が左手を救ふやうに一身同體となる(死

地に置けば個々の兵士は期せずして一致團結して相救ふ)。

「曰可」可は助動詞であるが問ひかけた助動詞を繰返して肯定の意を現はすこと英語に同じ。

“Can you...?” “Yes, I can” …問曰可……乎。答曰可」。江蘇省の吳と浙江省の越とは仇敵の國家であつた。

是故方馬埋輪未足恃也。齊勇若一。政之道也。剛柔相得。地之理也。

是ノ故ニ馬ヲ方^ナ輪ヲ埋ムルモ未ダ恃ムニ足ラズ。勇ヲ齊^ト、ヘ一ノ若クナルハ政ノ道也。剛柔相得ルハ地ノ理也。

故に銜^{くわ}を縛^{しば}つて馬を方^なべ(一騎だけ勝手に退くことを禁じ)。車輪を土中に埋め(車隊のうち抜けて逃げるを防止する)。かやうな方法を盡しても士卒の離散を制することはできない。強兵弱卒を一體として勇に一致せしめるは軍政の道であり、剛進柔退どちらも宜しきを得るは地理の利用にある。

支那事變で蔣介石は弱卒(雜軍)を前に立て、國民黨員は督戰隊となつて逃げるものを銃殺した、大東亞戦において印度兵、マレー兵などを前線に配置し英本國兵は後から督戰したが、前線から雪

崩れてくるのを防げなかつたのは「齊勇如一」でなかつたからである。

故善用兵者、携手若使一人、不得已也。

故ニ善ク兵ヲ用フル者ハ手ヲ携ヘテ一人ヲ使フガ若クスルハ已ムヲ得ザレバ也。

携手若使一人を若携手使一人と構成と變へて次のやうに講じる——善く兵を用ふる者はその手を携つて指揮し（人形遣ひが人形を操るやうに）幾萬人を使ふも一人を使ふと同じやうに意のまゝにすることを得るのは、彼ら士卒は働かなければ活きられない境地に在るからである。

The skilful warrior can lead his army, as a man leads another by the hand, because he places it in a desperate position. (C)

將軍之事、靜以幽、正以治。

將軍ノ事ハ、靜ニシテ以テ幽ニ、正ニシテ以テ治マル。

將軍の爲すべき務めは、靜にして奥深く、正しくして亂れない事にある。

孫子は靜と正とを將軍の事とし、老子は靜と正とを政治家の務とし、孔孟はそれを以て脩身の基

とする。「老子」躁は寒に勝ち、靜は熱に勝ち、清靜は天下の正となる。正を以て國を治め、奇を以て兵を用ふ。我れ靜を好めば民自ら正。重は輕の基礎であり、靜かなものは動くものゝ支配者である。柔性は靜を以て剛に勝つ。

能愚士卒之耳目、使之無知。

能ク士卒ノ耳目ヲ愚ニシテ之レヲ知ルナカラシム。

能く士卒の聽覺視覺を鈍くして聰明ならざらしむ。

この一節は東洋哲學の極意で、それを兵法に借用したものである。老子、孔子はそれを政治に用ゐた。「老子」善く國を治めるとは、國民を賢くするのではない、國民を愚ならしめるのである。國が治めにくいのは人民に智慧が多過ぎるからである。「孔子」國民はたゞ命に服従させるが、一々命令の趣旨を諒解せしめるに及ばない。

易其事、革其謀、使人無識、易其居、迂其途、使人不得慮。

其事ヲ易カシ、其謀ヲ革ム、人ヲシテ識ルナカラシメ、其居ヲ易カシ、其途ヲ迂シ、人ヲシテ

慮オモシムカルヲ得ザラシム。

其服務を變更し、其計畫を變革し、敵にも味方にも其眞意を測り識らしめず。その陣列を易え、行軍の道を迂回して、その目的が何處を指すのか（敵は中國の毛利か、否、本能寺だ）そこまで行かねば見當がつかない。

『老子』世の中は橐籥だ、ふいごは黙つていたら人が勝手に動かすのだ、ふいごから強く押せとか、緩く引けとか人間に向つて注文をつけることはない。こちらの動かすやうに無意識で従つてゐたらそれでふいごの役目は済むのだ。

帥與之期、如登高而去其梯、帥與之深入諸侯之地而發其機。若驅群羊、驅而往、驅而來、莫知所之。

帥スキ、コレト期ス。高キニ登リテ其梯ヲ去ルガ如シ。帥、之レト深ク諸侯ノ地ニ入り、其機ヲ發ス。群羊ヲ驅ルガ若ク、驅リテ往キ驅リテ來リ、之ク所ヲ知ル莫シ。

元帥が胸中に期するところあり、戰を令する、高い屋根に登つてその梯子を撒り去られたやうなもの（降りることも逃げることもできない）戰ふ外に何物もない」元帥が士卒とも敵諸

侯の地に入り（處を見定めて）強弩の發條機を切つて放つ、號令一下、矢は飛ぶ！ 前進あるのみ」命令のまゝに服従させること無智にして従順な群羊を驅るより易い、驅つて行かしめ驅つて來らしめ、士卒は何處へ何をしに行くのか？ 何も知らぬ、たゞ主將の命令のまゝに動く」。昨夜秋風入漢關。朔雲邊月滿西山。更催飛將追驕虜。莫遣沙場匹馬還。嚴武。

聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也。

三軍ノ衆ヲ聚メ之レヲ險ニ投ズ、コレ將軍ノ事也。九地ノ變、屈伸ノ利、人情ノ理、察セザルベカラズ。

大軍を統率して之を危険な地に投げ込むことは將軍の爲すべき第一義である。地勢による各種各様の作戰の變化。屈して退守し伸びて進攻する利と不利と、弱を以て強に化する人情の機微は深く考慮を要すべき重點である。

春秋の強國とは周制の破れ目から頭を出して、あばれ廻つてゐる畸形的存在で、國家構成は亂脈である。その亂脈から調整を求める無理なところに面白味があり、非常識な頭を持つたものが時と

しては理外の勝を得た例もあるが、それは無茶のまぐれ當りであるから孫子は不可不察として察しづめに察する。察するとは理解であるが、理解にも廣狹があり、認識にも深淺がある。この一結は生兵法の濫用を警戒したものである。

凡爲客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者、絕地也。

凡ソ客ト爲ル道、深ケレバ專ラニ、淺ケレバ散ズ。國ヲ去リ境ヲ越エテ師スルハ絶地也。

凡そ客（遠征軍）の道として深く敵地に入れば、士卒は戦闘に一致するが、浅ければ心も離散し、やゝもすれば逃亡する。故國を去り國境を越えて遠く敵地に陣するは（故郷の音信も絶え、生還の望みも失はれ）絶望の地である。たゞ戦ひ勝つて難關を突破する以外に道がない。人情の弱點が地理によつて現れる。

四達者衢路也。入深者、重地也。入淺者、輕地也。背固前隘者、圍地也。無所往者、死地也。

四達スルハ衢路也。入ルコト深キハ重地也。入ル淺キハ輕地也。背、固クシテ、前、隘キハ

圍地也。往ク所ナキハ死地也。

四方に交通の便のあるのを衢地といひ、敵地に進入すること深いのが重地で、浅いのが輕地である。險固を後にし隘（山峽など）を前にするのは包圍され易い地形であり、逃げ路なき形が死地である。

地性の上に人生觀がある、死地が最も底力の出るところ。

是故散地、吾將一其志。輕地、吾將使之屬。爭地、吾將趨其後。交地、吾將謹其守。衢地、吾將固其結。重地、吾將繼其食。圯地、吾將進其途。圍地、吾將塞其闕。死地、吾將示之以不活。

是ノ故ニ散地ニハ吾ソノ志ヲ一ニセントス。輕地ニハ吾コレヲ屬セシメントス。爭地ニハ吾マサニ其後ニ趨カントス。交地ニハ吾マサニ其守ヲ謹マントス。衢地ニハ吾マサニ其結ヲ固クセントス。重地ニハ吾マサニ其食ヲ繼ガントス。圯地ニハ吾マサニ其途ヲ進マントス。圍地ニハ吾マサニ其闕ヲ塞ガントス。死地ニハ吾マサニ之レニ示スニ活キザルヲ以テセントス。

（前章には散地では戦つてはならぬとあるが）もし止むを得ずして散地で戦はねばならぬ場合

には士卒の志を戦に協力一致せしめる方策を取れ。(前章に輕地は止る勿れとあるが) 止むを得ず輕地で留らねばならぬ時は後續部隊との連絡を完全にせねば、こゝで孤立すれば士氣が沮喪する。(争地は攻むる勿れであるが、敵が先づ險要の地を占め、たとひ不利でもこゝを攻取せねばならぬはめになれば正面攻撃を避け) 迂回してその後から攻めよ。道路の交叉してゐる地域では四方に氣を配つて守らねばならぬ。中立國の介在する衝地では益々中立國との交結を固くせねばならぬ。重地には掠めて糧食を續けるやう考慮せよ。圯地には速かに途を進んで遲滯してはならぬ。敵の包圍を受けたら敵は必らず一方を缺いで逃げ路を設け我が鬪志を弱めるであらうから吾はその鬪を塞いで自ら逃路を遮断せよ。死地に陥つたら士卒に活きられない勢を示してこれをして必死の覺悟を爲さしめよ。

これらは地性に應ずる常識である、實戦には時に應じて無限の變化をするから九地といふ。

故兵之情、圍則禦、不得已則鬪、逼則從。

故ニ兵ノ情、圍メバ則チ禦^ゴグ。已ムヲ得ザレバ則チ鬪^コフ。逼レバ則チ從^コフ。

故に兵士の心情としては、圍まれたら防禦に力を盡し、餘儀なき勢に推し詰められたら起つて

鬪ひ、危機切迫すれば命令のまゝに動く。

情とは人情、理念又は軍の情勢と解して何れも通じる。班超が鄯善に於ける戰術がこれである。

是故不知諸侯之謀者、不能預交、不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍、不用鄉導者、不能得地利。

軍争篇ニ出デタ一節(重複)。

四五者不知一、非霸王之兵也。

四五ノ者、一ヲ知ラザルハ霸王ノ兵ニ非ズ。

四と五とを合せたら九である。九地の變化のその一をも知らないやうでは霸王の兵を統帥することはできない。

武力を以て諸侯を服従せしめるが覇。徳政を以て天下を心服せしめるのが王。覇とはわが國では源頼朝から始めて北條、足利、豊臣、徳川などの幕府政治。春秋では五覇、齊桓、晉文、宋襄、楚

莊、秦穆。

夫霸王之兵、伐大國、則其衆不得聚。威加於敵、則其交不得合。

ソレ霸王ノ兵、大國ヲ伐テバ、ソノ衆、聚ルヲ得ズ。威、敵ニ加ハレバ、ソノ交、合スルヲ得ズ。それ霸王の兵に一たび其銳鋒を向けられたら大國でも其衆は畏れて容易に集り難く、霸王の兵力が威壓すればその親交ある同盟國でも力を合せて防禦に一致しない。

共同作戦の他力本願は御利益がない。聯合軍が脆いのは相互倚存して戦鬪に中核がないからである。

是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵。故其城可拔、其國可墮。

是ノ故ニ天下ノ交ヲ争ハズ、天下ノ權ヲ養ハズ、己ノ私ヲ信ジテ威、敵ニ加ハル。故ニ其城拔クベク其國墮ルベシ。

かやうに力強き攻撃を受ける時は同盟國でも頼みにならないから競争してまで親交國をつくらず、こちらから取入つて彼れの強きが上に強さを加へしめず。たゞ自己の力に信賴して威力を敵に加へる、その自主的覺悟があつて始めて城も抜くべく敵國も破壊し得られるのである。

「不養天下之權」權は秤で輕重をはかる器。群雄が對峙して力が相平均してゐるところへ他國が一方に同盟すれば平衡が失はれる。強國に媚びて高いところへ土持ちし、強國の強を養つて權の平衡を破るのは自ら力を弱めるものであるから獨立自主の信條を確持し、こゝに始めて國威國力が發揮される。春秋には策士跳梁して合從連衡説が盛行はれ大國でも自主獨往の觀念が弱かつた。現代にも自力的強い根據がなく、吹けば飛ぶ芥子のやうな弱國が、強國の庇にかくれて存在する。武力のないところに國の意氣もない。(歐洲大戰後に民族自決といふ美名の下に、強國の手なぐさみに地圖を彩つてもらつた小國の中に危い存在のものが多く、チェッコ、ユーゴ、ポーランドなどはドイツに整理された。

施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。

無法ノ賞ヲ施シ、無政ノ令ヲ懸ケ、三軍ノ衆ヲ犯フル一人ヲ使フゴトシ。

常法を外れた莫大な賞を施し與へ、常政にない峻嚴な懲罰令をかゝけて、三軍の衆を使役することいかに多數でも一人を使ふと何のちがひもない。

「犯」は用ゆであるが此の動詞には高壓的に使ふ意を含む。「漢庭榮功宦、雲閣薄邊功、可憐驄馬」

使、白首爲誰雄。陳子昂。

犯之以事、勿告以言、犯之以利、勿告以害。

之レヲ犯フルニ事ヲ以テシ、告グルニ言ヲ以テスル勿レ。之レヲ犯フルニ利ヲ以テシ、告グルニ害ヲ以テスル勿レ。

士卒を使ふに事を實行せしめるのみで、之れに告ぐるに言語を以て理由を説示するに及ばぬ。之れを用ゆる味方に有利なことのみを見せて、決して弱點を告げて意氣を沮喪せしめてはならぬ。

行動第一、宣傳第二、理論なんかを説明するに及ばぬ、有利な戦況を語つて調子に載せ、必勝の信念を抱かしめる。

投之亡地、然後存。陷之死地、然後生。夫衆陷於害、然後能爲勝敗。

之ヲ亡地ニ投ジテ然後ニ存シ、之ヲ死地ニ陷レテ然後ニ生ク。夫レ衆、害ニ陷ツテ然後ニ勝敗ヲ爲ス。

(前二句は死生存亡に處する兵の心理を説破した古今の名句である)。士卒を亡びる地に投ずれば亡びずして却つて存する。之を死すべき位置に突き落したら渾身の勇を揮つて死中に活路を見出す。それ兵衆は危害に陥つて始めて勝つ。

韓信が井徑口で張耳と共に趙王歇を破つた兵法(前漢書)。「爲勝敗」在來の解釋では(一)吾勝ち彼破れる。(二)勝敗を吾が意のままにする。(三)敗の字は削るべし。(四)必勝を勝敗といふ、以上の如き諸説あるが、著者の信ずる所では爲勝敗は爲勝で、敗は無意味の接尾詞である例證、一旦有緩急の緩は意義を有たぬ接頭詞、能辨異同の同は意義を有たぬ接尾詞。相反する字を重ねその一字を隨伴詞とする例は古文に例が多い、それは語路を整へるための文章構成である。

故爲兵之事、在詳順敵之意、并力一向、千里殺將、是謂巧能成事。

故ニ兵ノ事ヲ爲スハ敵ノ意ニ詳順スルニ在リ。カヲ併セ一向シ、千里ニ將ヲ殺ス。是レ巧能成事ヲ成ストイフ。

兵の行動を指揮するは先づ敵勢を詳かにし、しばらく敵の爲すまゝに順ひ、こゝといふ處を見つけたら力を併せて一方に鋭鋒を向け、千里の遠きも長驅して敵將を殺す。これを兵を用ゆ

るに巧みにして能く功を成す者といふ。

「詳順」一本に伴順に作る。戦機の熟するまで敵の動きに伴順ひ、力を蓄積し、機を見て一舉して敵の巨帥を斃す。詳は上平で音 Hsiang 伴は下平で音 Yang. 聲も音も字源も通じないが魏の武帝はこの解釋を取る。

是故、政學之日、夷關折符、無通其使、厲於廊廟之上、以誅其事。

是ノ故ニ政學ル日、關ヲ夷ガ符ヲ折リ、其使ヲ通ズルナク、廊廟ノ上ニ厲マシテ以テ其事ヲ誅ム。

廟議一決して宣戦を布告すると同時に、四方の關所の出入を禁じ、符（旅行免狀）を破棄し、敵國との交通を断ち、中央政府では官吏を督勵して各員に擔任事務の責を負はせる。

「政學之日」一説に出陣の日。「夷關」關を夷ぎと訓ませる説もある、關の機能を停止する。「厲」勵。「誅」服務規律により分擔事項の責を負はせる。「廊廟」出征軍を送つた後に文官といへども緊張して内政に遺漏なきを期せしめる。廊廟は祖先を祭る祠堂であるが祭政一致時代の熟字でそれを以て政廳の意とする。戦時には常法によらずして戒嚴令を以て國民の權利行使を一時停止又は制限

し、國政が軍部の權力に委ねられる（わが憲法では第十四條に定められてある）。「夷關折符」敵の間諜の潛入を拒ぐ。歐洲大戰には、言論機關を通じ又は流言蜚語により農民と軍隊との乖離を圖りデマを飛ばして内亂を煽動し、第五列は目ざましい活躍をした。英國は戦前から諜報機關に金目を厭はずドイツの海軍編成、陸軍工廠の機密を握り、殊に經濟戰に關する諜報は同國の特性を發揮して隅から隅まで商業間諜の網を張り封鎖を效果的ならしめた。特別諜報機關を中立國に置き商工業者を動員して交通、物資等に到るまで周密な統計をつくり、戰爭中に瑞西で發見された佛國の諜報機關が十四もあつた。1634年米國は銀行支店を利用して日本の資源調査を爲さしめた。

敵人開闔、必亟入之。

敵人開闔、必ラズ亟ニ之ニ入レ。

敵に隙があらば機を逸せず、之れに乗ぜよ。

「開闔」は開閉であるが闔は例の接尾詞。開は間隙則ち乗け込むべき弱點である。敵に隙があつても、ぼんやりと見送つてゐたら機會は去つてしまふ。

先其所愛、微與之期、踐墨隨敵、以決戰事。

其ノ愛ルス所ニ先ンジ、微ニ之レト期シ、墨ヲ踐ミ敵ニ隨ヒ、以テ戰事ヲ決ス。敵の愛するところの地點（港灣、險要、都市等）を先んじて占據すれば（敵は之を奪還せんとするであらう）。心ひそかにかくあるべきを期待し、墨（豫定作戰計畫）に踐り敵の行動に應じて戰を決する。

前節にも先奪所愛則聽、この節には先其所愛とあるが、この愛とは何を意味するか。釋尊。吠那加補羅で普賢菩薩に答へて「諸くの慾が愛を助けて人を迷はせる、愛から慾が生じる。愛が因で慾が果であり、愛から貪が生じるから愛を捨てたら善果が得られる。迷ひの巷から脱けやうとすれば愛を斷たねばならぬ。愛が深ければ深いほど迷が深くなる」と。戰爭にも迷は大害であり迷は愛から生じる。敵の最も愛着する絆を揺つて敵の迷ひを強度にして盲目的に執着せしめることは敵に弱點を生ぜしめる手段である。「大學」。人の性情は愛する所があつたら愛に偏つて正しき批判力を失ひ（戰敗の素因をつくる）。悪んでも畏れても哀んでもその通り。ゆゑに愛しても愛に溺れず、悪んでも坊主から袈裟に及ばない——愛憎のために心を誤らないものは少ない（主將の心が偏したら軍形に虚を生じる）。

是故、始如處女、敵人開戶。後如脱兔、敵不及拒。

是ノ故ニ始メ處女ノ如ク、敵人、戸ヲ開ク。後ハ脱兔ノ如ク、敵、拒グニ及バズ。

始めは處女の羞を含むやうに躊躇、逡巡して進まないから敵は油斷して備を弛べさる。その機をはぐさず、網から脱け出した兎のやうに突として攻入る、敵に拒ぐ機會を與へない。

孫子は引締つた句には押韻すること老子の文體に酷似してゐる、押韻といつても唐以後の狭く制限した韻礎ではない。女（上聲）*ny. 戸*（去聲）*ny. 兎*（去）*ny. 拒*（去）*chü.*「兵法の要は虞を以て不虞を伐つに在る、文化の進むほど機械は急速な行動を人類に提供する。意見が衝突しても九箇月間は戰爭に訴へない——國際聯盟規約第十二條——といつた悠長な戰爭が現代の速戰即決主義の下に行はれるものではない。速力萬能の白色文化とはそんな遲鈍にして律義なものでないからイタリ代表はこの規約は規約に値ひしないといつた。規約はどうあらうとも間道を通つて九ヶ月は愚か九十日でも九日でも九時間でも瞬間でも非公式な戰爭は始まる——それ戰爭は屁の如し、國際人の稠座の中でも、こらえられない場合はある。のつびきならぬ時は轟然一發、御免を蒙らねばならぬ場合もあらう。

この一結は千古の名文として漢學者に隨喜されてゐる——しとやかに美しい處女と誤認して、夜叉をも拉ぐ武士も情はある、彼女のために關門を開いてやつたら、思ひも寄らぬ脱兎が飛び込んで、あつといふ間もなく陣營の彼方に姿を消した——處女は處女でも近世的のお轉婆な乙女を聯想してはならぬ、乳母をもつて處女に代換しても名文のぶち毀こぼしとなる、處女は原則として溫良貞淑なるべきものだ。脱兎も快速を意識せしめるが、速いのは兎に限らぬ、馬も鹿もあるが、孫子のこの警句あつてからは兎をもつてスピードの記録保持者のやうに文に用ひられるやうになつた。西洋にもその例がある。遅い龜と競争させるにはライオンでも猫でも、ふさはしくない、龜さんの對照者は兎に限る。たゞしキヤルスロップは兎をラビットと譯したが孫子のいふ兎とはラビットではなくヘアである。ラビットは西紀三百年以後の輸入動物だから春秋戰國時代には支那にはゐなかつた。

火攻第十 一 HUE KUNG (Assault by fire) XII.

支那事變で重慶軍は焦土戰術を用ゐ、また黄河を決壊してわが軍を水漬けにせんとした、まるで焼豆腐戰法で、却つて自國民を惱ました、マレー戰で英國も焦土戰をやつた、現代の火焰放射器、焼夷彈は火攻の進化形態である。

孫子曰、凡火攻有五。一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。

孫子曰ク凡ソ火攻ニ五アリ。一ニ曰ク火人、二ニ曰ク火積、三ニ曰ク火輜、四ニ曰ク火庫、五ニ曰ク火隊。

火攻の種類が五つ。その一は火をもつて敵卒を焚殺する、その二は敵の糧秣を燒棄する、その三は被服武器等を積載する輜重車隊を燒き撃ちする。四は倉庫を灰燼にする。五は敵の陣營に向つて火を放つ。(第一は個々の人を目的とし第五は敵の集團に向つて上風から火を放つ。第二は食糧を目的とし第三は調度を指し、特に行軍中の輜重車隊を襲撃する。第四は軍需品庫、火藥庫などを對照とする。第三の例としては曹操が袁紹の輜重隊を襲撃して大敗に到らし

めた史實が擧げられる。

火攻とは火を以て攻撃を助ける残忍な戦術で毒瓦斯攻撃の如きは之に類し戦時國際法には人道上から非議せらるゝ手段であるが實際に於ては列國は軍の火力裝備を強化し、航空隊の中でも燒夷、爆撃隊の増加が顯著で、科學化兵團は瓦斯隊に重點を置き防毒覆面が全軍に配給せらるゝ外、更に進んで都市全住民に行渡らせる計畫を樹てゝゐる國家もある。

行_レ火必有_レ因、煙火必素具。

火ヲ行フ必ラズ因アリ、煙火必ラズ素ヨリ具フ。

火攻を用ゆるには必らず用ゆる原因がある、原因とは火攻に適する要素で、この要素なくして漫然として火攻を用ゐてはならぬ。煙火則ち火攻に要する原料機具は素より準備してかゝらねばならぬ。

火攻策には前掲五事のうちの一つ又は二つを目的とし、對象によつて火攻の準備を完成してかゝらねばならぬ。

發_レ火有時、起_レ火有_レ日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼軫也。凡此四宿者風起之日也。

火ヲ發スルニ時アリ、火ヲ起スニ日アリ、時トハ天ノ燥ナリ。日トハ月、箕壁翼軫ニ在ル也。凡ソコノ四宿ハ風起ル日ナリ。

火攻を行ふには次に述べるやうに、これに適する時と日とがある。火を發すべき時は久しく雨なく物が乾燥した時であり、火攻に適する日とは、月が二十八宿のうちの四星である箕、壁、翼、軫の星座に宿つた日で、この天象は大風の起ることを豫想せしめる。

近世科學は前記の氣象學說を否認するが、昔から霖雨、大風を豫知する傳説があり今日でも漁師農夫らは傳統的に信賴して疑はず又實際に於て適中することが多い。春秋時代では月の運行と星辰との相關から大風の起るを豫想したもので、たゞの迷信ではあるまい。

凡火攻、必因_二五火之變_一而應_レ之。

凡ソ火攻ハ必ラズ五火ノ變ニ因リテ之レニ應ゼヨ。

火攻は次に述べる五種の變化により敵の動靜を見て、機宜を失せず呼應せよ。

火發於内、則早應之於外。

火、内ヨリ發セバ、早ク之レニ外ニ應ゼヨ。

内應又は失火によつて敵營に火を發したならば機會を失はず之に應じて外部から攻撃せよ。

火發兵靜者、待而勿攻。

火發シテ兵靜ナラバ待チテ攻ムル勿レ。

火が起つても敵營が靜かで混雜してゐる形勢がなかつたら待機状態のまゝ敵の動靜を窺へ、敵の詭計に乗ぜられてはならぬ。

良將は落着く、雀は躍るが驚は踊らぬ。

極其火力、可從而從之、不可從而止。

ソノ火力ヲ極メ、從フベクシク之レニ從ヘ、從フベカラズシテ止メヨ。

その火勢を見極めて、これに乗すべきものならば直ちに乘ぜよ。その火力が單に我を誘致する

手段らしくば欺かれてはならぬ。

火可發於外、無待於内、以時發之。

火、外ヨリ發スベク、内ニ待ツナケレバ、時ヲ以テ之レヲ發セヨ。

火を外部から放つて効果ありと認めたならば必ずしも内應者が敵の陣營又は城内から火を發するを待つまでもなく、機を見て外部から火を放て。

火發上風、無攻下風。晝風久、夜風止。

火、上風ニ發セバ下風ヲ攻ムルナカレ。晝風久シケレバ夜風止ム。

火が風上から放たれたならば、風下から攻めるな（風上から攻めて敵を風下に追ひ込め。）「晝に大風があつても、それは夜まで續かない。すべて疾風は永續きしないものであるから風の起つた機會をばぐしてはならぬ。けふは暴風だが今夜火攻をやらうなどと思つてゐるまに、風は人を待たないで止んでしまふから巧遅は火攻に用ひられない。

人は火力により攻撃を助け、火は風力を須つて暴威を揮ふこの三つが統合されて火攻の目的が

達せられる」。

朔風吹雪透刀瘢、飲馬長城窟更寒、夜半火來知有敵、一時齊保賀蘭山。盧弼。

凡軍必知五火之變以數守之。

凡ソ軍ハ必ラズ五火ノ變ヲ知リ、數ヲ以テコレヲ守ル。

軍には前掲の如き五種の火攻法があり、五が變化して十となり百となり種々の手段が用ひられ、攻撃の法を知ると同時に相手方からも同じ手段の攻撃を受けることもあらうから數(臨機の策)を以て防守せねばならぬ。

「數」を星の度數と解する者が多いが、それは誤である、著者の私解では蘇老泉の高祖論に「漢高祖狹數用術」とある、その數で、策に通じる。數は去聲シユ、ア、shueとすれば副詞で屢(邦音サク)上聲シユ shu とすれば動詞、數へる(邦音スウ)。同音で去聲にすれば名詞、權謀術數など(邦音サク)。

故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以絶、不可以奪。

故ニ火ヲ以テ攻ヲ佐クル者ハ明、水ヲ以テ攻ヲ佐クル者ハ強。水ハ以テ絶ツベシ、以テ奪フベ

カラズ。

火を以て攻撃力を佐けばその利たること明白、水を以て攻撃の補助手段とせば一段の強さを益す。水は敵の連絡を遮断するに適するが、火が一炬にして灰燼に歸せしめるやうな恐るべき破壊力を持たない。(水はたゞ敵の道を絶ち又はその兵陣を二分することはできるが、火のやうに敵の蓄積した物資を一掃し能はぬ)。

孔子孟子老子は水を説いたが火を説かなかつた、孫子は水火を併せて説き義朝爲朝の二源は火攻を禮讀した、秀吉と韓信とは水を用ひ、家康は長篠と大阪とで火攻に成功した。現代の科學部隊は火と空氣との利用研究は相當に進んでゐるが水に就いての發明はまだ十分でない。空氣利用による空壓、水の利用による水壓によつて攻撃力を助ける方法は各國の國防科學研究所の課題となつてゐる。

夫戰勝攻取、而不修其功者、凶。命曰費留。故曰明君慮之、良將修之。

ソレ戰ヘバ勝テ攻ムレバ取ルモ、而モソノ功ヲ修メザル者ハ凶ナリ。命ケテ費留トイフ。故ニ曰ク明君コレヲ慮リ、良將コレヲ修ム。

戦へば必らず勝ち、城を攻むれば必らず陥れるも、その功の跡始末をして善果を得ないものは

不祥(悪)である、これを名づけて費留といふ、費留とは金と力との浪費濫用を意味する。故に明智の君はよく考慮して容易に戦を開かず、良將は戦後の處置に萬全の法を講ずる。

勇將猛將と稱せらるゝ者は勝を知つて勝を全うするを忘れ、つひに國家を危殆に導く。これ國を誤るジンゴイズム好戰主義で、フランス語のシヨヴィニズム Chauvinism である。

春秋列國の中で衛、宋、莒の如き小國二三を除く外は人口極めて稀薄で棄てられまゝの處女地が多かつた。かやうな時代は土地より人口である。しかるに群雄は不必要な土地を爭奪するため必要な人口を殺す。墨子戦争否認の重點はこゝに在る。現代でも白人國の或るものは日當りのいゝ沃土に廣く繩張りして有色人種の足ぶみを許さない一方には狭き瘠地で人口に咽せかへつてゐる國がある、かやうな不條理を訂正するため水平運動的な戦争が起る、黄金は水のごとく低い空間を補填せんとする習性がある。金満家が三代も續かざるゆゑんであり、國家においても搾取によつて肥滿したのは新興國家のために脂肪分を削り去られる。

非利不動、非得不用、非危不戰。

利ニ非ザレバ動かズ、得ルニ非ザレバ用ヒズ、危キニ非ザレバ戰ハズ。

軍備の目的は自衛であるが、戦ふからには勝を期する。勝の目的は利を收めるに在る。意地、娛樂、遊戯のため、又は氣まぐれに戦ふのではない。國是擁護のため危害を加へる敵を追つ拂ふのが基本理念である、だから——利を見ざれば動かかない、利得がなければ兵を用ひない、國が危くなるに非ざれば容易に戦はない。

マクドウガル氏の統計研究では人は幼年時代から何らの確かな目的なしに物を所有したがる性癖がある、これを獲得本能と名づけ、始めは單なる所有慾に過ぎないが、それが無節制に發達すれば所有惡となり盜癖となる。個人に於ける習癖は集團にも國家にも存在する。利のあるところに動くのは、やゝもすれば國家として侵略政策となる。亂世の梟雄といはれるものは、秩序の立つた治世にはその非常識な兇智を揮ふ機會がないから退屈する。退屈さまして戦争を製造する。彼らが赤手で大名譽を擧得するチャンスは戦亂より善きものはなく、諸侯の慾ばり心に迎合して領土獲得戦を説く、そんな野心に兵法を利用されてはならないから非危不戰の四字を以て節尾を結んだのである。

主不可以怒而興師、將不可以愠而致戰。合於利而動、不合於利而止。怒可復喜、愠可以復悅。亡國不可以復存、死者不可以復生。

主ハ怒ヲ以テ師ヲ興スベカラズ、將ハ慍^{イカリ}ヲ以テ戰ヲ致スベカラズ。利ニ合^{カフ}シテ動キ、利ニ合セズシテ止ム、怒ハ復タ喜ブベク、慍^{イカリ}ハ以テ復タ悦ブベシ。亡國ハ以テ復タ存スベカラズ、死者ハ以テ復タ生クベカラズ。

人主は個人の忿怒に乗じて師を興してはならぬ。將軍は怨恨を抱いて戰を始めてはならぬ。(戰争を経済眼から視て)採算に合つたら動き、差引き損失と見越したら止めよ——以上は表面から説き、以下は裏から歸納的に再敘する——むか腹が立つても沈靜したら又た喜ぶ時もある。恨の感情も解けて又たにこゝに變る折もあるが、國は一たび亡んだら復活することはなく、人は死んだら蘇生することはできない。

No ruler should put troops into the field merely to gratify his own spleen ; no general should fight a battle simply out of pique. If it is to your advantage, make a forward move ; if not, stay where you are. Anger may in time change to gladness ; vexation may be succeeded by content. But a kingdom that has once been destroyed can never come again into being. (G)
何といふ名文？ 兵法としてよりも文章として頼山陽が孫子を愛誦したといひ、カイゼルが没落後の僑居で歐譯の孫子を讀んで「廿年前にこの本を讀んだら…」と洪嘆したといふ。

戰爭は割に合はないといはれる、これは研究した採算のやうだが、その實は勝つたら割に合ふ社會運動であるがため、西紀前二千四百五十八年に黃帝が戰爭の仕方を創作してから強い民族的支持を受けて尖端は愈々尖り、さすれば切れる危険の中に人は生れ人は死に、禹域四百餘州が血で洗はれたことは何百回とも知れない。これは内亂であるが、對外的には英國が今日の大を成すまでに何度の大戦を経てきたか、又た今日の大を維持するため將來に何度の大戦を経過せねばならぬか。さらに大英帝國が没落するまでに幾度の戰爭を通過せねばならぬか。列國は豫算編成ごとに軍部と財務とが内閣會議で對立し、文化の大國家を築きあげるに軍備は主要な發動力を持ち、その代價、その智慮、その重大さ、その危険性において國家主要機能の何物も戰爭に及ぶ活動はない。戰爭が利に合するとは何か、戰勝國の帳簿の借方には次のやうな科目がある。優越感征服慾の充足、國家的憎惡の精算といった抽象的なものを除いて(1)土地割讓、(2)通商路の進展、(3)金錢賠償、(4)分捕物資、(5)食料原料生産地、要塞、港灣河川その他用兵地點の占據であるが、史上からみた春秋時代の戦利は(1)土地、(2)珠玉、(3)貢物、(4)美女、(5)珍寶、(6)重器(宗廟に備へてある祖先の遺物、九鼎大呂の如き)。

故、明君慎之、良將警之。此安國全軍之道也。

故＝明君之レヲ慎ミ、良將コレヲ警ム。コレ國ヲ安ンジ軍ヲ全クスル道ナリ。

故に賢明なる君主は冷靜に判斷し、良將は無謀の軍を戒める。この心あつて始めて國家を安泰にし、軍隊を保全し得らる。

この篇は名づけて火攻といふも後半は火攻以外のことに及んでゐる、火攻のやうな慘忍な戦術は餘り詳細に渉るを厭うたものらしく、火攻から一轉して得意の戦争原理を説いてゐる。

戦亂時代は強制主義としての國家を是認する政治思想の傾向がある。この思想は個人對國家關係から轉じて對外關係に移る時は自國のみの富強を圖つて他に對して優越な地歩を占め、更にこれを發展せしめやうとする。國家の分類に民族主義、國粹主義、勞農主義、排外的愛國主義、民主主義、帝國主義、軍國主義、國家主義、君主獨裁主義、國家社會主義、國家と君主、忠君と愛國との限界が甚だ不分明である結果は春秋の國家主義は則ち君主主義でもある。國家を絶對の實在とし個人をその分子に過ぎないものとするはプラトンであり、國家を最高の道德とすることは明治時代に加藤弘之博士が支持し今に到るも衰へない。孫子が「國家は利と見たら攻撃する、損と知つたら平和線に退却する」と主張するのは國をもつて營利團體と見做したもので、國際道德からみれば無茶苦茶

な兵法であるが、道德は常に經濟に支配され、經濟は戦争に振り廻はされる。現代の列國も表面の辭令は美しいが肚を割つたら孫子流で、機を狙つて爆發しやうとする物騒な存在である。金があつたら贅澤に戦ふ、金がなかつたら苦しまぎれに戦争する。國家が敵對關係に置かれる限りこの危機は永久的である、それに人間の好戰的本能が働きかけて法律、道德、風俗、政治、經濟など、世界中のどれを眺めても軍國的特徴を現はしてゐる。社會が經濟的安定を得た時は影は薄いが、安定を失つたらその社會は侵略主義の尖銳を現したがる。「新唐書」藝文志に載せられた兵家は二十三人、その著は六十部三百十九卷、その中で最も著明なものは孫、吳、尉繚で、どれも道德觀念を背景としてゐるが、中には道德を借りて兵法の幅を廣く見せやうとする欺瞞もあつて、戦争と道德との矛盾に對して調和する術を知らず、時々尻尾を現はす。

墨子の兼愛説が徹底しない限り戦争の原因である憎悪がある、憤怒と恐怖とは憎悪の類縁であるが憎悪ではない、しかし恐怖、憤怒、憎悪の三つは密接な關係があつて春秋諸國で、その三つのどれかを持つてゐない國家はないが、取りわけ吳越間には三者とも極めて強烈であつた。ヴァレンティンは「憤怒は憎悪の一表現で恐怖を感じないものに憎悪の念はない」とし、その特色として對象の破壊を希望する衝動を隨伴するが故に、越が大敗すれば吳人の心に憎悪心が消滅して快感がその

場處に代置され、反對に越人には吳に對する憎惡心が高まる。しかし孫子は「その感情によつて動かされるのは危険であり、憎惡、忿怒、恐怖によつて兵を起せば必ず負ける、そろばんづくで戦へ」と説くところは、まるで商賣人のやうである。儒道では勝敗よりも義不義に戦争の原因を置いて、たとひ弱くとも、負けやうとも、不利な結果が豫見されてゐても、正義と認めたら成敗利鈍は眼中に置かず猛然として立ち直ちに敵を攻撃するのが大勇であり又た人間の義務でありとする純理論が善い時もあり悪い時もあり、博愛家のいふやうに「進軍ラツパは殺伐で耳ざりだから木魚をたたいて進め、讚美歌を合唱して蟲も殺さぬ喧嘩をせよ」血を出さないやうに敵を殺せ、と、そんな慈悲心は自國を牲として敵を祭るものである。古代ギリシヤ、ローマの文化は戦争による捕虜の奴隸生産で築きあげられた、それ以後も引續いて形式を變へた同じことが行はれ、戦争は國際間の紛争の暴力解決術としても行はれる、春秋諸國の興廢起伏は一に戦争によつて決するが故に各國は國力不相應な常備軍を置き、當然の結果として租税の誅求となつたが、井田法から取り立てる地租収入といつても底の知れたもので、一世帯に百畝を興へて兵役に従ふ義務と交換し、「徹」といふ徵税法によつて什一（一割）を取るだけであつたが、それでは不足なところから周制を破壊して種々の惡税を興した。彼らは武裝國家の公權力を維持するため國民の貢獻（租税）を強ひられても無

いものは無いのである。平時でも軍事費に張り切つて搾取してゐるから戦争となつてもそれ以上に取り得られないことは春秋だけではない。歐洲大戰でも各國は戦前に軍備大擴張を行つて手一ぱいの賦課金を課し、それが上納されてゐないうちに戦争に入つたから租税財源がなく、戦時經濟は重に公債で賄ひ、公債の應募者が無くなるから高利で釣り、愛國心で動かしたが、愛國心は金貨より弱いものとみえて白人は土中に黄金を埋めて無財産を装ふものがあつたといふ。春秋では公債が無かつたところへ共產型の社會であつたため富豪もないから軍資金の調達法として孫子の案は藉糧於敵、掠於野の方法で、糧秣は敵國のものを喰ひつぶせ、水ぜめもする。放火で焼き殺せ、追つ拂へ、掠奪せよ、分捕りの多いものは賞與で獎勵する、切取り強盜もする、その手荒さに道徳家は氣が遠くなる。これが戦時非常經濟で、これ以外に軍資の出處がなかつたのである。現代でもそんなことを考へて戦争の貨借對照表をつくつてゐる國家もあらう、かやうな亂暴ものゝ見舞を受けるのが嫌やさに我々は國防に缺けがあつてはならぬ。缺け目から百日鬢が頭を出す。

用間第十三 YUNG CHIEN (The employment of spies)

篇名は間諜を用ふるをいふ。間は去聲として間者を意味せしめるが徐錯は間を平聲として間、隙とし間隙を視ふ者とする。この篇は間諜の使用法である。

孫子曰凡興師十萬、出兵千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。内外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家。

孫子曰凡ソ師ヲ興ス十萬。兵ヲ出ス千里。百姓ノ費、公家ノ奉、日ニ千金ヲ費ス。内外騷動シ、道路ニ怠リ、事ヲ操ルヲ得ザル者、七十萬家。

軍の構成が十萬、遠征千里ならば民衆の費、(將校を含む)官吏の給與、一日に千兩を要し、内も外も騷動し、道路にうろついて(輸送に疲れ)仕事も手につかぬもの七十萬世帯の多きに及ぶ。

「七十萬家」とは出たらめの數字ではない、井田法では八家が一組となつて農耕に従ふが故にそ

の中の一人が徵募され隣保扶助法によつて残りの七人が代つて耕し出征軍人の家族を養ふ制度であるから七十萬とは興師十萬から算出された數字である。「現代の國家動員令は戦時には(一)工場其他、(二)土地建物その他の工作物、(三)船舶、鐵道、自動車等の強制管理、使用及收用。従業員及び兵役に非ざる者をも含む徵用等が文明諸國に規定されてある。」春秋には果して實際にどれほどの兵數を動員したのか、歴史に萬とか十萬とか漠然たる數を示してあるが漢文では千、萬の字は多數を表示する時に用ひられるから精數ではない。武王が殷を伐つた時は裝甲車三百兩と近衛兵三千人とある。これは極めて少數をもつて殷を平げたことを示した史家の筆であるから實數はこれより多かつたことが前後の文勢で量られる。劉、項が鴻門の對峙に「項王の兵四十萬、百萬と號す」とあるが百萬は宣傳で四十萬は實數らしいが、これは前後の文脈から考へて多少の誇張があるらしい。齊、魏の馬陵の戦に「萬弩、道を狭んで伏す」とあるが、この萬といふ數は單に多きを示しただけであることは、馬陵を過ぎた人は、あの狹隘な峽間に萬弩は伏せられないといふによつて明かである。吳越は邊鄙の國であるから史の證とすべきものはないが、左傳に載つてゐる中で齊、晉の大戦に三たび華不注を周るとあるが、北平大學で研究せられたところによると、梁啓超の説では、大戦といつても三十支里の戦線に過ぎず戦期も一日で終局したのが春秋の戦争で、華不注とは泰山の傍の小

山であつて十分間で一週されるといふ。張煦の説では晉軍は八百乗とあるから五萬六千人と戦車八百と馬三千二百頭で、これに魯、衛、曹、狄、四國の参加軍があり、齊の防備軍も餘り懸隔がなかつたらしい。晉軍は山東から衛を経て山西まで數千支里の外にこれだけの大軍を輸送した大規模なものであり、華不注は泰山と山脈は連つてはゐるが距離は非常に遠いといふ。吳越の戦に十萬は過大とも過少ともいへない數字である。日本では戦車を用ひなかつたから軍用道路も狭く運輸の方法も完備しなかつたところへ部隊編成も研究されなかつた關係から十萬二十萬の兵を動かしてもへたとへば關ヶ原の平地戦ですら、それ全體が實戦に参加するのでなくして過剰兵力は遙かの後方にゐて聲援をなし、先鋒に飛躍力を添へるに過ぎず。時としては足手纏ひにすらなる。山崎合戦のやうに三韓征伐のやうに先陣争も起る。招募に應じた壯丁を除いて農民は戦争とは無關係で、戦争は双方の職業軍人間にのみ戦はれたが、食料工場（乾餼）軍需品工業は他の商工業を刺戟し、魏の汴梁、趙の邯鄲などは農業經濟時代にふさはしからぬ商工都市となり、農民も副業として部分品の家庭工業を始めだが、群雄割據に累せられて商品の賣買も五十マイルの圓周の外に出でず、大規模な交換經濟は成立しなかつた。

相守數年、以争一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之到也。非人之將也、非主之佐也、非勝之主也。

相守ル數年、以テ一日ノ勝ヲ争フ。而ルニ爵祿百金ヲ愛ミ、敵ノ情ヲ知ラザルハ不仁ノ到リ也。人ノ將ニ非ズ、主ノ佐ニ非ズ。勝ノ主ニアラズ。

相對抗すること數年で、最後の決勝は只だの一日——それが争點である。しかるに爵位、封祿、賞金を間諜に與へることを惜んで敵の情勢を知らず遂に敗戦に到るは不仁至極で、かゝる人物は主將たる器でなく、君主を輔佐する力もなく又た勝の中樞を握る智もないぼんくらである。

「不仁」普遍的博愛的の仁でなく一方的我的の仁である、こちらの仁は敵に取つての不仁であるが、敵情を知らなかつたら早く勝てない、戦が長引いたら國民の困難が増し、もし敗れたら慘禍は計量できない、この意味の不仁である。估小便宜吃大虧。非人之將」は非所以將人之器。「非主之佐」は非佐人主之材。「非勝之主」は非所以主宰勝之道である。三句を疊みかけて主張を強調したものである。敵情を知らない將に兵を託するのは藤八拳を打つやうに相手が狐と出るやら庄屋とくするやらわかりもしないで、やみに鐵砲を撃つやうなもので、かゝる人へ一六主義に國の運命を負はせて大賭博をうたせられぬ。

故、明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。

故ニ明君賢將ノ動キテ人ニ勝チ、成功ノ衆ニ出ヅル所以ハ、先知ナリ。

明君、賢將が兵を動せば必らず敵に勝ち、成功が衆人より擢んでるわけは、先づ敵情を知るからである。

先に知るか、後に知るか、時間の差だけで結果は同一のやうであるが、先に知つたものは勝ち、後に知つたものは負ける。負けてから知つたのは知らないと同然である。

先知不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度、必取於人、知敵之情者也。

先知ハ鬼神ニ取ルベカラズ、事ニ象ルベカラズ度ニ驗スベカラズ、必ラズ人ヨリ取り、敵ノ情ヲ知ルモノ也。

「先知」は鬼神に祈つて得られず、易占その他の事象から得られず、尺度常法に驗つても得られない、必らず人（間諜）から取り來つて敵の情状を洞見すべきである。

現代に於ける諜報機關は大使館を中心として在外武官、領事は最も有力な役割を務め。身體、

財産、文書に不可侵權あるを以て書類の送達其他に便宜があり。傍系としては在外官吏、旅客、文士、宗教家、商人等が機微的末梢的な探索に用ひられる。かやうに諸種の職業家を要する理由は、直接戦争に要する事項——假裝敵國の兵數、兵器、編制、裝備、要塞、地理の外、交通、科學、教育、思想等にまで分け入つて平時から嚴密な智識を持たねばならぬからである。戦地では避難民の言、捕虜の陳述、飛行機の偵察等は間諜の別働機能として有力なものである。

維盛が富士川で關東勢を防ぐ時に、東からくる旅人（實は源氏の間諜）によつて誑され三萬の敵を三十萬と、十倍に擴大して判斷した。これは現代でも行はれてゐることゝ過大、誇張、捏造の無責任に報ぜられた斷片情報を繼ぎ合せて作戰計畫の要素とするのであるから智者でも先見の明を缺くこともあらう。戦争の訓練がなく且つ臆病で、たゞ家柄によつて主將となつた維盛が水禽の羽音で逃げ出したのは嘖ふべきことではない、水禽の羽音が飛行機の爆音と變つただけの現代である。

故用間有五、有郷間、有内間、有反間、有死間、有生間。

故ニ間ヲ用フルニ五アリ、郷間アリ、内間アリ、反間アリ、死間アリ、生間アリ。

間諜を使ふに五つの種別がある（次節に詳述するやうに）郷間、内間、反間、死間及び生間（の

五つ。

五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也。

五間俱ニ起ツテ其道ヲ知ルナシ、是レヲ神紀トイフ、人君ノ寶也。

この五種の間諜が交互に、又は同時に働いて變幻測られず、これを神の綱紀（不可思議）といふ、それは勝を制する基調で人君の秘寶である。

老子でも超人間の力の働きを神といふ、一種の生氣說 Vitalism で、社會現象は機械的に相互に作用して神秘的な或る力がその間に働くとする。

郷間者、因其郷人而用之。内間者、因其官人而用之。反間者、因其敵間而用之。

郷間トハソノ郷人ニ因リテ之ヲ用フ。内間トハソノ官人ニ因リテ之ヲ用フ。反間トハソノ敵間ニヨリテ之ヲ用フ。

敵の郷黨の人を利によつて誘惑して吾が用を爲さしめるのを郷間といふ、これが五間の一。敵の官吏將卒を吾が味方につけて秘密を内報せしめる、これが内間で、五間の二。敵から忍び込

んだ間諜を發見し懐柔してこれを逆用するのが反間で、これが最も有利な用間手段として五間の第三に數へられる。

死間者、爲誑事於外、令吾間知之而傳於敵間者也。

死間トハ誑事ヲ外ニ爲シ、吾ガ間ヲシテ之レヲ知ラシメテ敵間ニ傳フル者也。

誑事とは虚欺の事である、死間をだまして敵地に潜入せしめ、別に送つた吾が間者をして「彼れは某國の間諜である」と素破ぬかしめるから、死間は逮捕されて拷問に逢ひ、自分の知つたことを白状するが、その白状したことは全く虚欺で死間自身が誑されてゐたことを知らぬ。この白状によつて敵は計畫を建て、我が思ふ壺にはまつて敗れるから敵は欺かれたことを知り怒つて間者を殺す、故に死間といふ。

憐むべし死間は始めから殺さるべき運命を負うてゐるが自ら知らず、自身が命ぜられた事を誑と信ぜずして敵に告げその戦略を齟齬させる。敵はこの間に欺かれたものとして激怒して殺す。鄒食其が漢の使命を奉じて齊に到り和議を開始し齊が守備を怠つてゐる隙に乘じ韓信が之を襲つたから齊王は鄒食其を煮殺して亡げた、これは死間に類してゐる。明智光秀が丹波の秦氏を取らんとし

て自分の母を人質として送つておいて秦氏を誘致して捕へたが、光秀の母も殺された、これも似た例である。毛利元就が敵の尼子國久とその臣の晴久とを離間する一策として死間に手紙を懐にして敵地に入らしめ、他の間諜をして之を道で殺さしめた、道行く人が聚つて觀れば手紙は元就と國久と内通してゐる往復であつた、晴久はその手紙を信じ國久を殺したから尼子の兵勢は俄かに弱くなつた。日米交渉が決裂に瀕したとき、在米日本人引揚げのため龍田丸を桑港へ送つた、この船が使命を果たして日本へ歸着するまでは戦争は起り得ないと米國人は信じ切つてゐた、しかるに突として日本の對米宣戰布告となり眞珠灣が奇襲された。偶然かは知らぬが死間の運に當つた龍田丸も途中から引返へして助かつた。

生間者、反報也。

生間トハ反リ報ズル也。

生間も五間の一つで前の死間に對し孫子が創作した名である、これは生命を全くして還り敵の情狀を報告する使命を持つて敵中に潛行する。

五間の外にモダン間とも稱すべき新商賣往來がある、國際的紛糾が生活資料であるから紛糾を見

付け又は製造し、國の行動を「意味ありげ」な事に歪曲しそれを反目する他の國に持込んでスパイを働く朦朧間がある、用事のない時は春秋の「縦横」に似た外交的横結といふ面倒な工作を始める」。間は軍事偵察のみでなく、敵國に潛入し又は敵國の新聞記者、政治家、宗教家などを買収して軍部と國民とを離間し思想的に内部から崩壊せしめるが最も有力な戰術とせられる。

故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事無密於間。

故ニ三軍ノ事、間ヨリ親シキハナク、賞ハ間ヨリ厚キハナク、事ハ間ヨリ密ナルハナシ。

故に軍事の總ての中でも主將たるものは最も間と親しくし、最も恩賞を厚くし、行動は最も秘密にせねばならぬ。

主將には用間費を自由に行使して間者を操縦させる、漢王が項羽と范増とを離間せしめる爲め反間を放たしめ黄金四萬斤を陳平に與へて其出入を問はなかつた（漢書）。出入を問はないとは收支の決算報告を要求しない機密費を意味する。現代でも機密費は一項目に計上して豫算審議にも内容の説明を要せず、會計検査院でも検査しない。國によつて五百萬から三千萬ドルの機密費を使ふ軍部がある。ドイツの國防科學研究所は作戰の基礎を科學的に研究する常設機關で、豫算も決算もない。

非_レ聖智不能_レ用_レ間。非_レ仁義不能_レ用_レ間。非_レ微妙不能_レ得_レ間之實。

聖智ニ非ザレバ間ヲ用フル能ハズ、仁義ニ非ザレバ間ヲ用フル能ハズ、微妙ニ非ザレバ間ノ實ヲ得ル能ハズ。

聖れた智者でなくては間を自由に働かす能はず、仁で懐け義で教へなくては間は心から主將に忠誠を致して死地に入らない。微妙な神機を洞察する力がなくては間の得てきた材料から戦の方針を定めることができない。

微哉微哉、無_レ所不用_レ間也。

微ナルカナ微ナルカナ、間ヲ用ヒザル所ナシ。

微なる哉、密なる哉、どんな微密なところでも間を用ひられないところはない。

この一節は在來の解釋は總て誤つてゐる。これは老子哲學の翻案であつて、最も柔いものは最も強いものを征服する。柔いものは固形體から流動體へ、氣體へ進み、つひに無となる、水の浸透するやうに空氣の充塞するやうに、それ以上に、無はどんな微細な空間にでも忍び入る、間諜の洗練

せられたものがそれである。

間事未_レ發、而先聞者、間與所告者皆死。

間事、未ダ發セズシテ先ツ聞ユレバ間ト告グルトコロノ者ト皆死ス。

間の諜報が未だ實行されない前にその内容を聞き知つた者があれば（軍機漏洩は瓦斯管の穴よりも恐ろしき中毒があるから）間はいふまでもなく、その事を告げてくれた功勞者といへども俱に殺してしまふ。

軍機のためには忍んで人情を没する、兵語で滅口といふ。秘密を保つためには先づ哀憐の情を殺してかゝらねばならぬ。

凡軍之所欲_レ擊、城之所欲_レ攻、人之所欲_レ殺。必先知其守將左右、謁者、門者、舍人之姓名、令_レ吾間必索_レ知之。

凡ソ軍ノ擊タント欲スルトコロ、城ノ攻メント欲スルトコロ、人ノ殺サント欲スルトコロ、必ラズ先ツ其ノ守將ノ左右、謁者、門者、舍人ノ姓名ヲ知り、吾ガ間ヲシテ必ラズ索メテ之レヲ

知ラシム。

撃たうとする軍、攻めやうと思ふ城、殺さうと謀る敵人あらば、必らず第一にその主將の左右に奉仕するもの——副官からボーイに到るまで——。門者（門衛、夜警など）。謁者（執事、侍史から用務傳達の小吏に到る）。舍人（馬丁、運轉手、炊事係、從卒など）に到るまでの姓名を知り吾が間をして必らず次手を索めてそれを内通せしめ（機會を見て直ちに間事を行ふ）。

平時でも要塞地帯の秘密地圖を相手國の大公使に賣込まうとする賣國奴があり、賣國奴を装うて諛事の軍機を賣り込ませる間諜もある。戦時には主將の周圍に敵國の餌に飼はれてゐる犬が動靜を嗅ぎ廻つてゐるから傍に人がゐない時でも行動に注意せねばならない。

必索敵間之來間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也。

必らず敵間ノ我ヲ間スル者ヲ索メ、因リテ之レヲ利シ、導キテ之レヲ舍ス。故ニ反間得テ使フベシ。

何とかして敵から潛入してきた敵の間諜で我が機密を間がふ奴を搜し出して、好きお客として利を以て啗はせ、うまく利導して之れを含めて丸め込んで逆用する、この手で敵間をして我が

爲めに働かしめ得る。

代議士を買収して議會で質問させたり、労働運動で生産力を麻痺させたり、文化運動に藉口して反戦主義を鼓吹させたり、買溜め賣惜みで物資を偏在せしめたり、間諜の用は廣くなつた。

因是而知之、故郷間内間可得而使也。

是レニヨツテ之レヲ知ル。故ニ郷間、内間、得テ使フベシ。

反間の裏切りによつて敵の情状を知り得るが故に敵地の郷民も敵の官吏も我が爲めに働く適當なもの求め得られ、到るところに我が耳目を撒布する。

路中説話、草裡有人。」この間者の逆用によつて敵の郷人の中で利をもつて釣り得べきもの、官吏の中で不平を抱いてゐる者を聞き出してそれを利用する。

因是而知之、故死間爲誑事、可使告敵。

是レニ因リテ之レヲ知ル。故ニ死間、誑事ヲ爲シテ敵ニ告ゲシムベシ。

反間の手蔓から引いて死間を使ひ、敵を苦肉の策に乗せ、それを敵に知らせて戦術を誤らせ得

る。

因是知之、故生間可使如期。

是レニ因リテ之レヲ知ル。故ニ生間、期ノ如クナラシムベシ。

反間の言によつて敵情を知り、生間も期を誤たずして復つて報告せしめ得る。

五間之事、主必知之、知之必在於反間。故反間不可不厚也。

五間ノ事、主必ラズ之レヲ知ル。コレヲ知ルハ反間ニアリ。故ニ反間ハ厚クセザルベカラズ。

五間の運用は主將が必らずこれを熟知せねばならぬ。それを知る脈は必ず反間から手繰られる。

故に反間は厚遇して吾が用を爲さしめねばならぬ。

孫子は哲學者のやうに諄々として戦争原理を語つてきたが火攻と用間との二篇によつて兵法家特有の残忍と不道德とを露出せしめた。間は倫理的に非難さるべき人格であるが世の中を理想通りに造物主は造らなかつた。

道德化された愛國主義は自國を愛するとともに他國をも排撃せず誤らざる倫理の標準によつて協

調するのである、墨子は全人類を同一視し愛の力によつて戦闘なからしめやうと説くが、人には自國を愛する本能感が常に力強く作用し、祖國には絶対尊があり、この尊さを維持するためには力に訴へるも止むを得ないとする、これが現實である。

純な倫理の主張に向つて側目もふらずに邁進する學者には敬意を表するが、敬意を表されつゝその國は亡びてしまふ。孟子は仁義の標準の高い國君が天下を統一するであらうと豫言した。それは歴史的根據があつて、舜は徳を以て堯の禪を受けた、禹も同じ道を履んだ、啓は賢をもつて禹に繼いだ、夏桀は強力であつたが不道德であつたから王位を道德家の殷湯に戦ひ取られた。殷紂の周武にやられたのも歴史が繰返へしたのであつた。社會の事象は凡て歴史の發展過程の一連鎖であるから弱くとも徳のある人が天下を取るはずであつたが、その豫言は大外れに外れて強暴な秦が兵力をもつて天下を統一したことから見れば、道德的分量においては孟子より劣つてゐる孫子の方が先見を誇り得られる。

國際間を道德によつて歩まうとするのはアイデアリストの空想であるが故に、そんな氣體のやうな主義に拘泥せず國民に訓へるに殉國犠牲の精神を以てし、この精神の缺乏は國家を衰亡に導き各個人も災厄を受ける、之を救ふには英雄主義による自國強調以外に國家國民の福祉は求められない、

従つて火攻を惨忍といひ用間を非道德など、評論することは、たゞ宗教の領域にのみ通用する言である。

銃聲劍光のそればかりが戦争ではない。人生生活は斷間なき血戦場で、いつでも、どこにも、吾らは、いまでも戦ひつゝある。吾らは間諜に包圍されて一生を終へるのだ。

昔、殷之興也、伊摯在夏、周之興也、呂芽在殷。

昔、殷ノ興ル伊摯、夏ニ在リ。周ノ興ル。呂芽、殷ニ在リ。

昔、殷が國を興した時、伊尹が敵國夏にゐた。周が興つた時は呂尙が敵國殷にゐて、相手國の虚實を知悉してゐた。

伊摯は伊尹、湯王を相けて夏を滅ぼした。呂芽は呂尙(太公望)、周武王の參謀總長となつて殷を伐つた。

故、明君賢將、能以上智爲間者、必爲大功、此兵之要、三軍之所恃而動者也。

故ニ明君賢將ノ能ク上智ヲ以テ間ト爲ス者ハ必ラズ大功ヲ爲ス。此レ兵ノ要、三軍ノ恃ミテ動

ク所ノ者ナリ。

故に明君賢將のみは能く智能の群を抜く士を簡んで間諜に用ひて大功業を成就する、これ戦の要訣で、大軍がその計畫に依頼して動向を定める所のものである。

湯武の大聖にして始めて伊呂が働かせ得られた。三軍は間なくしては動けない。

伊尹、太公望を間諜の仲間に入れて込んだのは用間篇の意義を強めるためには有力な支持ではあらうが、餘りの得手勝手で、儒道で神のやうに崇拜する二聖が間者の役を勤めたとは怪しからんと憤慨する學徒が多い、しかし怒るのは少し早い、わが次に説くところを聴け。

堯とは天であり舜とは神であり禹とは偶像の意味である、こゝまでは超人間の存在であるが、殷湯、周武は神の線から落ち、人間のうちの優れた政治家に過ぎぬ、四書五經にもさういふ風に段階がつけられてゐるやうに思はれる。もちろん尙書は周代にできたものであるから周室のお抱への御用學者が骨折つて武王の事蹟を糊塗粉飾して神聖化した形跡が不體裁にも紙上に残つてゐる。君が既にさうである、その臣として叛逆を佐けた伊尹、太公は後世で想像してゐるほどの聖人ではあるまい。孟子はこの二人に柳下惠を加へて三人を聖として許してはゐるが孔子より下に評價してゐる。周武は聖の純なものでないが故に、その行動に無理と不自然とがある、その不自然な罅隙から頭

を出したものが伯夷と叔齊とであつた。伯夷といつた有力な反対者が現はれることは、征殷の役が國民の總意でない證據である。太公が殷を討つプランを樹て、伯夷がそれに絶対反対を唱へたのを孟子は共に聖人の行爲として許し、たゞ觀點の相違であるといふが、いくら孟子の説でも無批判にさうは受取ることにはできない。觀點の差とか解釋の相違とかは枝葉末節にのみ許されることで、かりにも天子を討つといつた天下の大事に相反する解釋が、ともに正しいとして認められるやうなら聖人も糞もあつたものでない。伊尹太公を高等間諜と見ても必らずしも冒瀆ではあるまい、この節は伊尹太公に少し格を下げてもらひ、間諜の資格を大に引き上げ、双方から鞘寄せして、二人を自説の保證人としたもので、これが孫子の兵法である。

この節は前の非聖智不能用間以下の七言二句に強く照應して、開卷劈頭からこゝまで強氣で張りつゞけ、更に一段の強き斷定を以て徐かに十三篇の筆を收める、筆陣整正にして擣つべき一點の虚をも見出せない。

春秋は希臘羅馬の英雄時代に酷似し、殺氣に充ちた環境を反射して人類智識の一大飛躍を遂げた記録が孫子である。文といひ想といひ何人も拘束し能はぬ天馬行空の氣は孫子によつてのみ感受される。衰世のにやけた文學とちがひ、戦亂時代の男性的特産物である。筆下に血が滴る。

昭和十七年六月十五月初版印刷
昭和十七年六月二十日初版發行

兵法孫子(二、八〇〇部)
定價貳圓

【出版協行發承認】
第七二二〇八第ア

所	版
有	權

著者	北村佳逸
發行者	竹上孝太郎
印刷者	堀井清
印刷所	弘文社印刷所

北村佳逸 京都府京都市上京區廣小路寺町東入
 竹上孝太郎 京都府京都市上京區廣小路寺町東入
 堀井清 京都府京都市下京區東九條山王町三八
 弘文社印刷所 京都府京都市下京區東九條山王町三八

發行所

京都市上京區
廣小路寺町東

立命館出版部

電話上④四八六二番
 振替(大阪)二六九四四番
 (東京)七五三六二番
 會員番號一四〇五一六番

配給元
 日本出版配給株式會社
 東京市神田區路町二丁目九

KI 27
45